巻頭言

編集前記

垣内 隆

Editorial, prepositive

Takashi Kakiuchi

インテリジェント・デザイン (ID) というのをお聞きになったことがあるだろうか。これはいま米国ではホットな話題である。何かを知的にデザインするのかわかれるかもしれないが、そうではない。今われわれが知っている動物や植物は、進化の結果として生じてきたのではなく、インテリジェントなもの、すなわち全知全能の存在、すなわち神がつくりたもうたがゆえに存在するのだ、という考え方を指す言葉である。アメリカ化学会の会員誌「Chemical & Engineering News」では、編集長の Rudy M. Baum 氏が“Editor's Page”でこの問題を取り上げ、それについて投書が殺到している[1-3]。それが人ごととは思えないのである。

米国では学校で進化論を教えるとはならないという動きは以前からあったようだが、近年、こうした動きが強くなってきている。カンサス州の教育委員会は、進化論は不十分だとして ID を生物などの教育カリキュラムに含めることを定めてしまった。ジョージ・W・ブッシュ大統領は、最近、いろんな考え方があつたことを教えるのは良いことだと、ID を学校で教えることへの賛意を表明した。政治家がレトリックで厳しい質問をかわして行くというのは、昨今、わが国でも見慣れた風景である。しかし、慣れれば良いというものではもちろんないし、この発言が、多様

な考えを認めるという多元主義の装いをとりながら科学を信仰に置き換えることを公に認めているという事実は重大である。

ID を標榜する人たちの主張はわかりやすい。まず、ギリギリスや蝶があんなにも精妙な仕組みと美しい姿で、ATP のエネルギーを最大限有効に使って生きているのは驚嘆すべきだ、という。これだけなら全く同感なのだが、次に、こんなにも複雑で精巧な装置を作ることができるのは、われわれを超越した存在、つまり神以外に考えられない、とたたみ掛けてくるのである。

いにしえより、神はわれわれが説明できないことを説明できる存在として、崇められてきた。かつて人は、日蝕に恐れおのいては再び太陽が出てくることを、日照りが続けば雨が降ることを、神に祈った。惑星や恒星の動きを正確に説明でき、予測できる今では、村長が神に祈れと命令することもない。スーパーコンピュータで気象の予測ができるようになりつつある現代では、雨乞いの山は草木が生い茂るばかりである。こうして科学の発達とともに、神の住む領域は一方的に、確実に狭められてきたはずである。

ところが科学と技術がもっとも高度に発達しているはずの米国で、つまり神の肩身が最も狭いはずの国で ID の動きが活発になっている。このことは、たいへんパラドキシカ

ルに思われる。わが国における歴史教科書の動きとオーバーラップして見えてくるのは老眼のせいかもしれないので、それは改めて検討するにしても、この ID 問題は、現代の象徴的な争点として考えるに値する。

哲学的には、進化論を認めるか否かは本質的である。それは、まさしくこの私、思考し、愛し、行動できるこの私が、そしてまた神を信じることのできる精神を宿すこの私は何によって来たるのか、という哲学の根本問題にどういう態度とるかということに他ならない。投書のひとつにある「造物主 (creator) あるいは造形主 (designer) を何ら認めることなしに進化論を全面的に受け入れるとなると、人は無神論的な世界観を持つことにならざるを得ない。この世界観は、人間の精神的な面を否定し『物質の領域だけが存在するもののすべてである』という物質的な観点のみを受け入れるものである。」[2]との理解はこのことを陰画として問はず語りに表明している。進化論の是非は、したがって生物学の教育をはるかに超えて世界観にかかわる。

この哲学論議を別にすると、進化論否定論にごまかされやすい直接的かつ最大の要因はその複雑さにある。今ではヒトゲノムをはじめ全ゲノム解析がすでに行われた生物は少なからずあり、また、遺伝子レベルでの進化プロセスの研究が大きく進展しているにしても、なおわからないことは山ほどある。しかし、それは科学の課題を示すものではあっても神の存在領域を確保するものではあり得ない。「科学は不思議なことを説明することができるだけでなく、予測することもできる。それに対して ID は何の予測もなしえないではないか。科学はそれをベースに正否を判断する。それをなしえない ID は科学の一構成部分たり得ない」、というアメリカ天文学会会長の指摘[3]はまったく正しい。

問題は、信じることは容易だが、科学的に物事を考えたり理解したりするには、ハードワークが必要だ、ということである。科学を教育する意味はここにある。ところが、現代では、この自明のことが意識的にも無意識的にも疎んじられるようになってしまった。

わが国では中央教育審議会が「崇高なものに対する畏敬の念」を強調するようになってからもう何年にもなる。この「畏れる」が神にひれ伏することを意味することはいうまでもない。これが ID と通底する考えであるというのはたんなる思い過ごしではあるまい。ひれ伏したり、お百度を踏んでいる暇があったら、数学や物理、化学や生物学を身につけるべき、つけさせるべきである。

電気分析化学に進化論が適用できると考えるアナロジーは荒唐無稽にしても、電気分析化学は、より一般的に電気化学は、けっこう複雑である。ポーログラフフィーには、極大波などという規則的だが一見、訳のわからない現象も存在して、素人のみならず学者をもおののかせるのに不足はない。日頃、妙なボルタモグラムやインピーダンスプロットを定型に押し込めて満足している嫌いはないか？

科学は世界観にかかわるのである。この科学の一分科からも、科学観、世界観を語る必要があるのではないだろうか。個別細分化された先端科学・技術という有り様が、トータルな科学的思考を弱体化しているのではあるまいか。プラグマティズムは、必然的に神の存在を必要とする、というのは哲学的真理である

[1] Chemical & Engineering News, February 7, (2005). [2] *ibid*, April 18, (2005). [3] *ibid*, August 29, (2005).

(かきうち・たかし 本会編集理事)